大貫 昭彦

歴史ロマン・オンライン鎌倉 5「鎌倉時代の服飾」

2020 年 6 月 11 日

頼朝の服装

①は京都の神護寺蔵の伝頼朝肖像画です。冠に黒い上着（袍という）を着て、絵では見えませんが腰に革製のバンド（石帯）を締め、太刀を佩き、手に笏を持っています。③ ④ の束帯くたという最高に正装した姿です。ただ、③は公家の束帯、④ は武骨な束帯、鎌倉様式です。頼朝の束帯は、④でしょう。

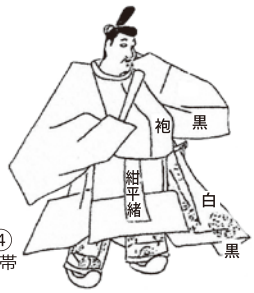
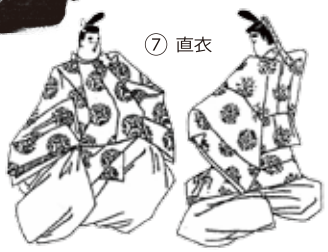
② は元鶴岡八幡宮、現在東京国立博物館蔵の頼朝像です。頭に立烏帽子、手に笏を持つ⑥の狩衣、袴姿です。袴の裾は紐で括ってあるので指貫です。狩衣は公家には略装ですが、武士の世界では正装とされました。① ② に共通しているのは、生地を蠟引き、糊張りした強装束、襟は昔の学生服に見られる詰襟（盤領）にして、威儀を正しています。萎装束や左右の襟を引き合わせた垂領は、寛いだ服装です。

服飾の歴史

しかし、強装束や盤領は、着脱が苦労、窮屈です。そこで服飾の歴史は、略式、簡素化に向かったのです。例えば公家の正装は、束帯から ⑤ 衣冠、⑦ 直衣に変わります。衣冠は、今でも神主の服装ですね。大祭のような重要な行事では、位階を表す紫や緋色の袍を召し、月例祭などでは白色、他の神官は、いつも白色（白丁姿）です。

武家の場合は、将軍クラスは ⑤ 衣冠、③ 束帯で上洛参内、社参しましたが、やがて ⑦ 直衣、さらに簡略にして ⑥ 水干狩衣にしました。水干は糊張りせず、水張りでパリッとさせる薄手の生地で仕立てた盤領の上掛けです。こうして見ると、盤領は正装、垂領は普段着として扱われたことが分かります。頼朝も、平常は ⑧ 直垂を着ていたのでしょう。

直垂いろいろ

頼朝のような身分のある武士の普段着は、⑧ の右端です。直垂は、普通は袴に着込むのですが、この人物は袴を着けず、着流しです。十分寛いでいますね。立烏帽子、袖口は広い大口、身分の高さを示しています。⑧ の左端は出仕する時の御家人の姿。行動しやすく折烏帽子、袴の裾を括っています。直垂と袴が揃った生地、色目、文様ですから、直垂上下、略して上下です。その後ろは、付き従う家人です。袖幅が小口ですね。

⑨ ⑩ は、さらに身分の低い庶民の直垂。⑨ は平常時、⑩ は戦に駆り出された時の姿でしょう。筒袖の直垂に丈の短い小袴を穿いています。ただ ⑨ ⑩ は、まだお館様に仕える身、さらに下層の人たちは、冬も裸同然だったでしょう。鎌倉時代に描かれた「一遍聖絵の中には烏帽子も被らず、下帯一枚の男の姿が見られます。